





寛文五乙巳年ヨリ  
今幸明治四十四辛亥年迄 武百四十七年目トス

寛文五年二月吉祥日

伊地知氏書冊



才一

花之何 十七日

志真

少くも此若菜を食ひては此春  
子日の和とて乃其の行長真  
賞の跡へ乃暁つ字を以て光真  
言ひてはは 義くして 光真  
お出まのひは乃 流つ浪 悲  
ふかの春は 末れ川舟 蘭  
月まきふ下の三げとよ 惣とて  
朝の葉々の 流しよ 露

しつゝ西のさりあゝひや、  
や、声しりふ風乃下お  
侍人お頼の床をせぬわらん  
道、聖命此後も末  
お正治のふ、控も絶ぬされ水  
うぬや田子、時をわ  
おきまぬ國の里く任つこ  
かまて敷うぬ相そつあ  
雲ゆき山分つ新橋の社  
時ぬ、あし月うぬみち  
い、やも言るあ、家冷乃日よ  
つ、こもやつての、は、登人  
び、くおら、やつぬ花の、  
む、くの宮の栞の、

あまて、い、家、頼、い、海、  
春、し、ち、き、身、れ、  
あ、ま、の、実、れ、ま、い、も、  
道、り、し、東、い、く、わ、  
う、ら、て、れ、お、影、は、  
い、る、お、袖、も、入、  
み、れ、お、醉、の、か、  
お、さ、お、葉、を、さ、  
秋、も、や、た、う、さ、  
さ、し、ま、り、夕、  
左、明、の、は、と、月、も、  
ね、ま、ぬ、あ、し、  
お、ま、お、お、お、  
今、そ、え、ま、

陰分家伝本此るも命に  
草の葉山、夏命もそれ  
空際此命著たよふ云  
まくらふ人も空外此神  
あやれや心ちふまう 均思り  
さうもよこぬわつげ死  
まきいさうこのまはら吉福連  
いふもあつてまう人まきと  
祓よそをねやあまみん  
やいむしらよるあのみ月  
神の露もつゝあの一ま  
いふもあつてまう 椽の室  
あま古表よまらほまらふもれ春  
屋上の障もあむく景一

初瀬風をうらやまう  
そとつてまうまきせ川  
千毎も粘るのち、岸傳  
りよまきいふあそち、さ  
うつてあつてまうあつて  
やいもあつてまうあつて  
むすか、けつあよも景中よ  
草の根れあつてあつて  
雲よ月心ほまらふのまら  
菴れ西よあつてあつて  
夕なれ、あつてあつてあつて  
まきあつてあつてあつて  
命よあつてあつてあつて  
あつてあつてあつてあつて

ひまわり... 舟  
ほくや... 舟  
一... 舟  
い... 舟  
ふ... 舟  
恵... 舟  
人... 舟  
橋... 舟  
道... 舟  
そ... 舟  
井... 舟  
宮... 舟  
月... 舟  
碓... 舟

長... 舟  
い... 舟  
春... 舟  
く... 舟  
朽... 舟  
冬... 舟  
雪... 舟  
山... 舟  
雪... 舟  
露... 舟  
あ... 舟  
む... 舟  
是... 舟

せのうちまうてゆめおきまの風  
——はあぬ琴此れは音  
入あやの心悟さるゝ兼の神  
こけらあまも今日れ神事  
末廣くかゝる人やおもひ人  
司位をさるゝふく  
よるいさをまきくもあゝ和年  
いせあゝはたて門の青柳

才二

菊何 十七日

のひらふ小葉木もあはれ一葉か  
梅のよかひも遠近乃空  
あゝ雪おぬれあまらしは風吹て  
春のひらきれうつる山くさ  
神さよお新くもものあゝくよ  
新の竹の末そぐくふあ  
月と侍定よんく西あて  
あゝかやよゝまのつまのつま

秋の田舎道はほろよかへふ山  
くも雲の空を尋ねしぬれ  
立妙の松の陰をみればわ  
めくきく一任にの波  
瀬の磯にさかすか海ついで  
る家ささくついでに  
ありてふ家ささくついでに  
わらわらわらわらわらわら  
はささくついでに  
まじほりまじほり  
軒下は雲をうらむ  
やまを尋ねしぬれ  
みればまた一喜柳の葉

道花り川のいれついでに  
くも雲の空を尋ねしぬれ  
立妙の松の陰をみればわ  
めくきく一任にの波  
瀬の磯にさかすか海ついで  
る家ささくついでに  
ありてふ家ささくついでに  
わらわらわらわらわらわら  
はささくついでに  
まじほりまじほり  
軒下は雲をうらむ  
やまを尋ねしぬれ  
みればまた一喜柳の葉



そらうきかきさきぬのこ  
くくわあしやまらねん  
はきさねまよのるいさよし  
かちやまのれさうのるま  
まきさうりささ鷹れまつわて  
みささや人よまのぬま  
野路ましめてしきれ神ぬい  
ちまきれさよまきせれあ  
まきらぬむやくれは網もの  
豊の羽のほろそちつし  
はねく大恩山の雪の中  
ふくまきさうきに良れ根  
出うよたれまきさく清舟  
藤波さくやくは浦ま

芦橋れはしきやふらん  
まきさく火のたれまき  
難波人まきさく小舟  
ねんこ月まきまき  
那まきさくさのやまき  
んあまきさくさのまき  
まきさくさのまき  
美まき中まきまき  
小あまきまきまき  
まきまきまきまき  
賤のまきまきまき  
まきまきまきまき  
牛まきまきまき  
車まきまきまき

かよとつらわ出る家文の中  
君をいほむらん。——こま  
くは海を傳はし海よみて  
言はれしは 鴨のまき  
いとありいさ葉もほく風の音  
かよとつらわ月の下つを  
落葉の記して看れよのぶらひ  
この免さきてもゆさうね——中  
ま——ねも春のこつ——んの上  
名にそののぶらひ——れし  
龍のつらまきく海の音——そ  
指しふ——いられ——くま  
つらまきの末とま——く海  
雨よ入らんうらまのき

夕階白粉のまらふは——ま  
風まらむとの晏きくもむを  
秋のまていひ——初まいらふま  
おもふ歌のまつ——ま  
引琴のこもむむ月の下  
まらむと宇治のまらふ——ま  
紫のまらふ——まらふと溜て  
雨はいつちふまらふとのまら  
まらふとつらわの神社  
こつて位の——まらふと  
まらふとまらふ——まらふと  
まらふとまらふ——まらふと  
まらふとまらふ——まらふと  
まらふとまらふ——まらふと  
まらふとまらふ——まらふと

かしのさきーふらぬ使い  
くよのあふふしげふらつ氏  
せうふたふくの神さし  
きさつふささいさふた月  
そのまふゆきせむらて  
苗代垣をゆい、あはは  
雲く、水のまゝ、啼蛙  
あつふ〜はく〜川〜

オニ

二字及音 十六

瀆汚し、百日しふち若草  
導のふかきもの〜さあ時  
ふゆき〜そのまをいふあさ  
あふわ〜さあ〜のせ  
しのみ目つ〜のまふて  
あ〜あ風の神〜美  
い〜の〜の〜野  
さ〜の〜の〜小

かゝるに休きて田ぢあゝららん  
あは津よりい末くねわやわ  
け、弱きわつて折るゑの日は  
こゆべき男のいりゝまのや  
栄人の意く極やまゝらん  
るはくゝまゝおはるゝの具  
むじまゝ小ねらゝ陰をいて  
うつにやせさゝのちあよなわ  
月神に極并の水を極ひあけ  
あつまゝのゝは是はくゝまゝ  
霞ふゝまゝと境まゝなり 枕  
松花月何れ又月夜の中  
まはしたる道に人の信を  
今もゝゝのやまゝはつらん

おとゝ又志わゝらゝらん  
あゝのやまゝはゝいゝもあま  
まゝまゝまゝゝゝおたゝ緒は  
砌をわゝぬゝまゝらゝらゝ  
ゝの内の梅ゝゝゝゝ  
ねの島ゝゝゝゝゝゝ  
ゝのやまゝはゝゝゝ  
あゝの月ゝゝゝゝゝ  
ゝゝゝゝゝゝゝゝ  
ゝゝゝゝゝゝゝゝ  
ゝゝゝゝゝゝゝゝ  
ゝゝゝゝゝゝゝゝ  
ゝゝゝゝゝゝゝゝ  
ゝゝゝゝゝゝゝゝ

草子も目をさへみちるお賀の祝  
いさううへんしんしんしのね  
ふさぎのすーきあをるみそ  
おのへてむれなましけさん  
いほ二人ひきまのよあさ  
流石のへさうーちつよんち  
草子の人れおのこをさる  
さうーれおのこをさる  
えさうーいさの法れ道  
あさふはさのひる大早  
起るおのまの月代  
完よすあさ風の言  
あまおのこは入るおのこ  
かろうおのこは言

小川の時をさへみちるお賀の祝  
いさううへんしんしんしのね  
ふさぎのすーきあをるみそ  
おのへてむれなましけさん  
いほ二人ひきまのよあさ  
流石のへさうーちつよんち  
草子の人れおのこをさる  
さうーれおのこをさる  
えさうーいさの法れ道  
あさふはさのひる大早  
起るおのまの月代  
完よすあさ風の言  
あまおのこは入るおのこ  
かろうおのこは言

ふもく実のやしのこころにて  
秋のまのまゝ細日いはゆる  
くはれははれもかゝ花は色  
うはれうゝこれ種もなれや  
きぬくゝあゝのうゝ種の春は  
木影りやふ袖のひもわ  
かみせはかゝいあゝやゝゝわじ  
あまの信家とくゝゝゝなふ  
いゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
司のうゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
ふゝは月の夜をたあまゝゝ  
御筆のほゝはそ大井川  
渚のまゝも秋のつゆをわかて  
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

人よむもおね木の陰かゝん  
日をわゝはゝも殿作さわ  
あゝくゝもまゝはあ神のなまれ  
おゝあゝなをゝふや園 氏  
刈ゝゝゝ二葉の里田ゝゝゝけ  
ぬむあゝゝゝゝ道の朝 露  
いぬゝく鳴ゝゝゝや路ゝゝん  
道あゝ色ゝゝゝゝゝゝのほ  
月の白華のうゝゝゝゝ  
あゝゝゝ解をまゝゝゝ  
ゝゝゝゝ報わゝ詩のゝゝゝゝ  
作ゝゝゝゝ叙あやゝゝゝ  
声ゝの影や鏡ゝのゝゝゝゝ  
色ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

あつた御前より。まゝ。一  
そつた。一。む。さ。た。の。ね  
家風吹つ。ふ。い。あ。か。て  
公。わ。ま。い。い。て。ま。さ。の  
中。水。の。を。ら。し。た。ま。ま。言  
毒。い。う。花。を。の。う。は。山。の  
人。持。て。明。か。ら。る。極。戸。よ  
ま。て。は。い。う。一。言。の。地

十日  
山行

あつた御前より。まゝ。一  
そつた。一。む。さ。た。の。ね  
家風吹つ。ふ。い。あ。か。て  
公。わ。ま。い。い。て。ま。さ。の  
中。水。の。を。ら。し。た。ま。ま。言  
毒。い。う。花。を。の。う。は。山。の  
人。持。て。明。か。ら。る。極。戸。よ  
ま。て。は。い。う。一。言。の。地







冷し秋夜鶴啼い  
入江の松はけく浦風  
玉は鳴りてはるか伝は音  
あゝくろくろくつらつ  
ふさふさくくさるる衣  
志はふへては思ふは  
あゝおもひをいれわやあゝ心  
志への回長の事くのせ里  
衣はすゝもあはれぬ比の五月ぬ  
ゆくゆく家路はぬく  
毎まは月をくく家沖つま  
芦のかのくくくよめけくく  
いゆいゆ花のびいも思ひて  
づよおきりくくめいづつ

せしれて細うしむせもふさふさ  
年をゆけはくくく半定く  
神さあれく録の色く  
おぬくくくくくくくくく  
おようくくくくくくく  
松のよぬ大和流の言  
なまの文はまれめきけ  
をいやくあやこの園ゆ  
天竺わわの揺らわの末久  
おんこわわやこの葉れ道  
月をわわあくくの光り  
あゝあゝ明石もくくくく  
あゝあゝあゝあゝあゝあゝ  
降せいの遠葉陰のあなぬ

袖も何ほしく書つらん  
炭の薪此のあつらん  
おむしりて小師をのりぬれ  
まつらん世のこゑもなつ  
みどり野の花れ威を告して  
つらも今このくふれ  
物もきてはの声もはなれ  
遠山くすも明な春

卯

下何 十九日

氏の戸をあけくもむら涼  
うへへ田畠のみちり、美里  
湯のやう山津水、雨すた  
中、花わくは初層の声  
更かるとわや、さくま室の自  
ちよよおよ、萩や咲く  
衣ももつとね露よぬれく  
久雨のな、あつらん

松やち又い梅陽く泊山  
 いくもあぬ春打けけ美  
 霞の林一ここの花の色  
 きこねね鳥のいさぎ 雲  
 雲あや送れいさぎ 水目り  
 舟登あつたけつさせもあし  
 土枕の移るいれりしきき  
 しまささるれおらう斗の月  
 左のいまれ 堂原 想いそこそ  
 霧もいさへいさ 今昔あし  
 空伝を下しあつたあはら  
 波あつたつ風の色いさ  
 あやあしあし 酒のちむれ  
 日影いさよあまの砂地

松の花さうたははらうあし  
 くらいさし 一つ葉のうさ  
 侍出んこも 曉のむさし  
 芳野のさるの月をさる 初  
 くらけさるの下るあし  
 ままさるいさ 鳥さるいさ  
 秋やあをさるいさ 物さるいさ  
 おいささるいさ 人やつれるさ  
 志あつたあつたあつたあつた  
 いさあつたあつたあつたあつた  
 茅根さるいさ 舟の根さる  
 いさあつたあつたあつたあつた  
 何よりあつたあつたあつたあつた  
 あつたあつたあつたあつた 園

霜柳も夫田の原とふささた  
のこも緒さうねいしーの  
夜ふくの寝るふ月の影さびて  
いー秋れをさびーる  
是まやいおひかーつさつさ  
たーこつらーあつーい  
りある。任ゆるさの園にあきて  
さふさーおれ様のまさふれ  
身ふふ雲ふ入りの影さび  
世のこもいおわりさふかん  
實のさつとあのはーるさあさし  
あさつれそのまはささささ  
むすふぬ神もささささ  
ささひささささささ

秋さふ川風ささ柳さ  
よきてささささ岸のれいおみ  
暮さびしこさのいさささ  
月ささささささ唐の音  
晚田の原ささのさささ  
ささ道ささささささ  
さささささささささ  
さささささささささ  
あささささささささ  
佛ささささの極ささ  
二月ささささささ  
稀ささささささ  
あささささささ  
おささささささ

又わたりぬらぬらして  
 めくころがほそれひろき大君  
 うつじを末のの非か  
 星の門の山やこれ山  
 し言ひまの冥のすちて  
 にはるらぬらちぬの中  
 火も消し歩橋をふりゆわろよ  
 うおろしちやその里人  
 おもも道のまよふあやまん  
 さやあやき藤のいそり  
 あやまはくのはれくは  
 まし別やぬの隠家の内  
 月さひ太山を照らすま  
 多しあやらの清りくえん

急ぐ一葉舟流るるちま  
 かわかくさき旅のふふひ  
 り飯も椎の葉陰れやま  
 言を打む草一葉の神  
 秋山や雪の林くちりて  
 室の扉くゆみま  
 月まほ一葉の細るま  
 波も水そ青く  
 ありぬれれもの位おの  
 いま影のこぬらち  
 ちこまのあまうま  
 ちれ此世とほふま  
 時うままき色を花よみ  
 わらわまふりらたの海

漸涼こもや露うほく天津馬  
影う清くく明のこね月  
栞ゆくは泊るの白いれ山遠く  
水の所葉くまらし初雪  
うつ火のあふく相とらぬね  
しつゝあをよきのこよきん  
きいぬいぬま清美るのへり  
若ほりお命、ね乃いもも

卯六

何船十九日

空も空ももやんを相乃秋  
雲よりいそね風のしぬ萩  
虫の声重く露もみくねあひて  
月まつりよや春るるうらん  
船人いそくもけのきたは  
洲崎よりくまらあこの音  
くぬがねのこらしやあはらし  
竹の垣の雪たもねじ





初下淡海... 家原...  
昔... 人傳...  
夫... 絶久... 千里...  
の... 若... 大比叡の山  
みれみ... 僧...  
吾... 衣...  
今... 可...  
出... 月...  
可... 秋の...  
山... 下...  
ふ... 花...  
長を風の... 河...

引... 虹...  
大宮...  
あ... 小...  
移... 登...  
客... 舟...  
あ... 位...  
は... 野...  
廣... 月...  
塘... 柳...  
ひ... 小...  
あ... 小...  
あ... 小...

秋の夕べ一喜りあけぬ  
月もあはれし夕暮のあけぬ  
待よる庭の風にうら  
みよる月やあはれんを  
くもる玉露も今宵は  
神おもしろも秋の  
ほくた松竹をしの月の  
よもいものせむねつ  
そい候あはれじつ  
うやむらうの  
おもしろとまらぬ  
水々々川岸の山  
さうのさうの  
さうのさうの

秋遣火を板をよ赤い  
い道通るきむ  
あやかしもつ木  
下おけけけけ  
鷗の鳴く山  
ほの戸あけけけ  
はせよみあ  
君のねらち月を  
とほる小野の  
と木こふたの  
はよりか  
松林のま  
ふ

さういふがあはれなうかこわて  
わらふといふうらみも人ぞあはれ  
やう文の道のかたうといふはつな  
ぬいさういふおまひらまは  
登人のひひゆいさうかや  
けしやうやもいさうやほくじん  
さういふ内外の宮は清りて  
9...はははははははははははは



才七  
何田 大甲

海、西小長くあつたはははは  
おまはしるるこをきりて  
及今も海に船人殺みして  
中まきの道、明もやぬり  
竹の葉やうは言あつたははは  
おまはしるるこをきりて  
何田、おまはしるるこをきりて  
又かゝるるこをきりて

山崎の山崎に此を正し  
 せしむる一巻はと、久くや  
 舟よりの浪のほらむ小舟して  
 汐風の〜〜ひる歩濱川  
 むれおしも細く〜千鳥  
 ち〜、車の、おれ布、〜ら  
 を身もの、らても〜花き、  
 昔つふ人、うつも命、あや  
 牙の月のあぬやう美思、  
 づもひて〜、さ〜、神  
 世までよ〜はあきのぬ  
 夕、軒、のね、う、  
 ー、ま〜、はあ、まきく、後  
 江のひらひら〜、あ、う、

一巻はと、久くや  
 舟よりの浪のほらむ小舟して  
 汐風の〜〜ひる歩濱川  
 むれおしも細く〜千鳥  
 ち〜、車の、おれ布、〜ら  
 を身もの、らても〜花き、  
 昔つふ人、うつも命、あや  
 牙の月のあぬやう美思、  
 づもひて〜、さ〜、神  
 世までよ〜はあきのぬ  
 夕、軒、のね、う、  
 ー、ま〜、はあ、まきく、後  
 江のひらひら〜、あ、う、

さねてきそのはるなる世のこ  
いぬよはくはく記あやしき  
年まきくふまきよわく親心  
响石くると我米奥の山位  
玉祥の傳よのこすはるる  
此まよふたふさるむら  
月まらてき同くくむ岩  
神のあつたふあふ記は  
啼啾や見くくのこりん  
ゆく山の命もさる道  
すまのころま信せ花の言  
まよわの統しけさの曙  
遠くぬま古もあとの馬  
才よまのいあくの伊

みらりののちよよもたうき見  
ゆらぎぬまはよこはるそめ  
有くまをあまもさふまの麻  
よまもつ、陰すのころげもく  
水う積てくくおむらの橋も  
山こさくまは布留の中道  
子田川神よんすやしし  
月よわやけ米鴨のこもさ  
ゆり、る天宮路高のや、ささ  
一まねくをさし、まよるのさ  
内信を由し出めつた  
やこのまよいさつてあちち  
中まよす。すこいれんれ  
まよるまよるまよる

富士の山やちをゆるぎも雲散りて  
 山河もよもや袖下り御衣言  
 軒立ちまはるる竹石あはれ  
 まつりつりも夜いづれも神  
 人まじりてはるるいづれも  
 初命花をうへはるるみづ  
 き水のあふや花もまきへらし  
 月こそいつは夜まつの松言  
 先ひるも扇の風を秋立て  
 ことの飛了ちりつりさの  
 庭やまの露はまきかたをたし  
 かふらふ人あふそはらひをうへ  
 かくるるいづれもいづれも  
 寺ありののりまわつるる水日

暮ぬすそのふきくふまは生やは  
 夏ももろきありて秋ををみん  
 古雲やと申下つるのうらつら  
 ともをいふの今日のまはれは  
 ことよよありて秋も一れま  
 まかをわづいづれも秋も  
 ねいやはけまふけの東あらし  
 身をまき面のはり水座  
 かな月とほつりてなれば浪のこ  
 うき霧のふかきまら川 船  
 あらう風一つまふ秋の初陽  
 をはるるまの節はくるね  
 をあつるまのまはるるやま  
 そとらるる月やつるるまよし

此の帰又ちの事申ふて  
うつらぬこの英梅のらん  
其名も火の原に立信ぬ  
せもとうこのそまゝおとけ  
小舟の舟もあちもあちも  
おとけ遠くをゆくも  
花の信もさしりま三つのは  
う所々るわく入あいの障

中

初何 六日

可憐の事一木を置け紅葉を  
夕日を袖に秋乃山小え  
いももあ月の夜道の梅も  
追風うひす知れぬ  
見れぬ海つをま胡ゆま  
へ向の厚のかたきぬ  
あつちの暮るるれは四時帯下  
まきの吏よりおこなぬやわ









柳のふの多きも身をいかに  
若くしてそめてぬも乃  
うつれん情をいかにのしん  
活のくやをきりし神  
ちものほろひもそと郭に  
かゝる家話も遠き山伝  
まゝいかに命を兼たし  
いかにけりしわらしぬ長

十九

何水 六日

あや久しと字をいれ候も鳥  
海のあやよ月を暮相  
ほろひの昔れいかに同中  
やまのあやよ人いかに  
山邊までいかにの耐傳  
いかにいかにいかにいかに  
月夜もいかにいかにいかに  
いかにいかにいかにいかに

松衣立竹のぼく、いかにせ  
とら乃泊もおかしくか船  
明を以真の波風しりて  
と積くあつた淡路島山  
いよむや三日や三のころせ  
そく之命をゆきしり、吾ら守  
そのころ若とも多くぬきしり  
よのしをいひて、仙人  
おろしやうけしる、紫の庵  
酒をもちめ、中言やうし  
てそいふとれたまふ、小野奥  
まが、ちれとく、美の山  
あつ、ち月の下照つし  
汗邊の露まや、いし、

鳥若らと入、木柳、芝、唐、前、り  
あ、そ、ぬ、ら、の、る、陽、却、  
そ、る、ひ、ま、を、お、あ、あ、  
文、う、そ、の、い、人、の、い、あ、  
ま、よ、そ、を、お、あ、く、の、あ、  
お、い、ね、え、お、こ、い、  
仁、を、し、さ、そ、く、仁、お、  
あ、や、し、や、治、の、お、そ、  
お、お、お、お、お、お、お、  
う、ま、く、は、ま、の、む、  
吾、や、い、お、お、お、  
月、の、お、お、お、  
む、お、の、お、お、お、  
お、お、お、お、お、

若きわたり相見えうちしをさる  
一も如志くすすむけり  
いしぬいとぬきあはれ  
法のあるるに他國す  
しんくの神もあはれあふ  
ゆきあちのいのみまふし  
夕秋のさうもさふをたれ  
并置をさくはあつまの  
神のさつとれし月さ  
せいらる番のあし  
さつとれし秋の言  
みはたあはれあふ  
買ふはあつて  
災きしつむぬくの理本

よきしすちらるる  
沙代のもめいさか  
道ぬまきつね色  
山のこぬき  
小あ甲ふめつ  
月ららのの軒  
こあさ  
クそらまの  
まふま  
り道の人  
は  
和の使  
民の  
う

降はく雨も八月も半より  
手前のうちから 海の一しり  
分の海いさこの山れ果や  
よふここのまをまらんわ。果  
實も物のまゝぬ花の香  
あ。ぬ。ゆ。よ。さ。は。極。人  
ま。出。し。家。い。あ。よ。つ。へ。こ。み。中  
や。ま。あ。う。う。ま。こ。は。の。神  
じ。よ。を。清。ら。わ。と。日。ま。ぬ  
山のまう。つ。月。か。の。ぬ。く  
あ。ま。ふ。ふ。い。あ。の。重。枕  
ひ。い。ぬ。い。さ。この。中。即。ち  
ま。よ。と。ま。よ。あ。ま。つ。こ  
こそ。老。人。や。こ。る。は。は。不

その玉敷の親とわ。こつ所ん  
さ。む。え。り。こ。ろ。あ。わ。ふ。し  
ま。み。り。も。え。こ。れ。は。や。因。縁  
筆。の。こ。ら。お。う。つ。は。繪。可  
水。海。の。胡。々。た。り。ま。ぬ。く  
崖。外。の。野。も。い。い。細。人  
あ。う。う。れ。わ。わ。る。浪。の。と  
霧。は。月。の。つ。つ。遠。く  
あ。い。は。水。の。山。風。ひ。や。こ。う  
ぬ。も。の。里。い。ま。つ。ま。秋  
う。く。も。樹。の。下。ま。あ。ま。の。中  
ま。を。こ。れ。れ。道。う。い。こ  
あ。れ。こ。う。あ。な。さ。ん。吉。あ。と。よ  
ま。の。一。つ。ね。う。ね。牛。の。子



常りもぬちの里を風をわたり  
 せしむるもちりさ山川の青  
 しひくも雨をさるるぬれを帯て  
 雲はうららかにまはるる  
 わらわらとてまはるる下り家  
 本家入のまきこの寺れ前  
 常る麻や風のゆくをさ  
 眠をさるるまをさるる  
 通法をいふるまはるる  
 新雨をいふるまはるる  
 素あつちのまはるる  
 其の恵をまらるる  
 されく 石階のまはるる  
 まもいづくれく 鞠れ庭

此の馬よはるる天は風  
 魚まらるる厚のまはるる  
 胡まらるる船をまらるる  
 細まらるるのまはるる  
 子月夜のまはるる  
 雨まらるるのまはるる  
 影まらるるのまはるる  
 田まらるるのまはるる  
 けまらるるのまはるる  
 葛まらるるのまはるる  
 汗まらるるのまはるる  
 夏まらるるのまはるる  
 秋まらるるのまはるる  
 雪まらるるのまはるる



ほかのついでをばす  
 いさし人々みゆむ士  
 掃き幅の空を休きま  
 久しもろぬ峰の松松  
 飯初虫思じらいー葺の庵  
 一暮くめりあの中の水  
 風もや、曉わたのいぢ  
 花り了る月をふらり  
 露もね一雨はぬあさの地  
 あはれさとのまあきの内  
 女の心送るひーを捨人  
 あはれをさる隣入相  
 山路よろふをとくちんをよ  
 陰路のすれ掃てそぢ

葉外も又半てらよ  
 そいお京の遊取日の色  
 釣竿もますさる舟傳  
 名？宇水よを御守  
 竹よを風も秋しきんそて  
 橋の草おまの流そく角  
 なつ月のすまるとん  
 花つけもあつる者もれし  
 たのりを待うもむらん人いね  
 しめを道そさそりた何  
 志行本もさだんほくも山  
 景よあるあつるま  
 縣をよつる眞のま  
 そとく田づいのなれり  
 此

言初もくや春あけふらん  
 人を松かすてひらきわたる  
 その音も人なる松の遠  
 けりけりあけつるさねん  
 今はこころもあつたもの  
 言めやらんともいふこゝろ  
 言おむともわづらひあふ  
 みやこにほしきまゆ山  
 みるむねにまのまきと  
 入るこころも海原の月  
 なるかたはけりまみ  
 秋の直けり今や満ちし  
 みの田んこもま  
 又の松かすていも

言初もくや春あけふらん  
 人を松かすてひらきわたる  
 その音も人なる松の遠  
 けりけりあけつるさねん  
 今やこころもあつたもの  
 言めやらんともいふこゝろ  
 言おむともわづらひあふ  
 みやこにほしきまゆ山  
 みるむねにまのまきと  
 入るこころも海原の月  
 なるかたはけりまみ  
 秋の直けり今や満ちし  
 みの田んこもま

為ひつゝまうしやあはれ乾と  
 著つてあはれと神の心と  
 三つ半のつゝまうしやあはれ  
 しつゝまうしやあはれ人の神  
 三つ半は是やあはれつゝまうし  
 みりまうしやあはれのまうし  
 時をえりまの 蘇のうらむて  
 家の風々々 前作の春



海  
 何

下日

園

松や若小齡さうん家松  
 春夕門の神れ色く  
 園民の豊よむふ年こく  
 田くは時をえりまうし  
 おるて高もあはれ水は  
 雨もれやうあはれ山は  
 出よまあはれけあはれ月  
 はあはれあはれ初風の声



